絲綢之路
シルクロード
SILK ROAD

2019-夏
No.90

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。

京都御所建礼御門 2004年

【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

公益財団法人
文化財保護・芸術研究助成財団
FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH

ケベック旧市街の歴史地区

（カナダ）

ユネスコ世界遺産（文化遺産）シリーズ　©UNESCO

ケベック州南部の都市。人口の八〇パーセントはフランス系住民。フランスの北米植民地として発展したこの地を巡る十七世紀以後の英仏間の確執が、今なお色濃く反映している。

旧市街は城壁で囲まれ、市のシンボルである旧総督邸シャトー・フロントナックがセント・ローレンス川沿いに建ち、その足元には旧市街の中心広場プラス・ダルムが広がっている。南の高台には、七年戦争後（一七五六～六三）イギリス軍が築いた星型の城塞（シタデル）がそびえている。

（一九八五年に文化遺産として登録）

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

巻頭言

令和の御世を迎えて

今、日本列島は新緑の季節を迎え、梅雨入りを控えながらも快適な季節と申せましょう。そうした中、去る四月三〇日に天皇陛下は御退位され、上皇となられました。

そして、五月一日に皇太子殿下が御即位され、第一二六代の天皇となられました。

この一連の流れは歴史的には江戸時代の光格天皇の御退位以来、二〇〇年ぶりの出来事となりました。私たちは、はからずも歴史の転換期を見とどけたことになります。

時代は「平成」から「令和」と変わりました。新しい御世が豊かで平和な時代となることを願うのは、日本人全体の総意でしょう。

二十一世紀の幕が開いた時、誰もが新しい世紀に期待感を持ちました。それを打ち砕いてしまったのが、九月十一日のニューヨークの悲劇でした。

私は、こうした事件に遭遇するたびにユネスコ憲章前文の冒頭の次の言葉を思い出します。

「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」

日本は、令和という時代になりました。かつて、アメリカの第三五代大統領となったジョン・F・ケネディは、就任式において、「国民の皆さん、国家が皆さんのために何ができるかを問わないでほしい。皆さんが国家のために何ができるのかを問うてほしい」と語りかけました。

御退位に際しての上皇陛下の「おことば」、御即位に際しての天皇陛下の「おことば」も共に含蓄に富んだものでした。令和の時代に繁栄と安寧を求めるならば、ケネディの問いかけのこたえとして、国民それぞれの立場でそれなりの努力をすることが肝要かと思った次第です。

財団は、平成と共に産声をあげて歩んでまいりました。時代は変われども、私たちの業務に関する姿勢に変化はありません。

「文化による社会貢献、世界平和への貢献」

財団の創設者でもある平山郁夫先生の提唱されたこの心のもと、今後も邁進してまいります。財団の大きな使命は文化・芸術を守り、これを次世代に伝えていくことです。これはなかなか難しい仕事です。

文化・芸術というものは人間の知的生産物を、具現化したもの、と私は考えます。私たちの祖先が、そして私たちが生み出したものを次世代にきちんと伝えることは、今を生きる私たちの義務であると、信じます。

現在、財団は様々な業務と取り組んでおりますが、喫緊の大きなそれは、来る十一月に東京で開催予定の「第十五回・日中韓文化交流フォーラム」です。

年頭の御挨拶でも申し上げましたが、このフォーラムは日・中、日・韓の間が政治的にギクシャクとした関係にあった時でも中断することなく続きました。この点に関しては、中国も韓国も高く評価しております。

私たちも、そうした雰囲気を受け継ぎ、未来志向のもと、フォーラムの関係の中で三ヵ国の関係をいかに発展させていくべきか、という問題にも取り組んでおります。

本年のテーマは「音楽」です。中、韓両国の委員の先生方と緊密に連絡を取り、秋には東京から素晴らしい友情のメロディーを世界に発信したいと願っている次第です。

財団は、その名の通り、貴重な文化財を守り、国の誇りともなる芸術の発展のため寄与いたしたく存在しているわけです。

しかしながら、ここ数年の傾向ですが、財政面で苦戦を強いられております。私どもは、これを打破すべく経費節約はもちろんのこと、資金の有効な運用、支援者を増やす不断の努力等々を重ねています。

私どもの仕事は派手なものではありません。むしろ地味な努力を必要とされています。しかし、その努力の積み重ねが、日本が目標としている世界に冠たる文化芸術立国の成立につながるものと思っております。混沌とした世界情勢の中で、この努力は、前記の世界平和への貢献にもつながるものと信じます。

最後になりましたが、私は理事長として財団の運営に関して重責をになっていることは、十分承知いたしております。と、同時に私には日本画家としての創作活動が控えております。これも大切な仕事です。健康に留意して、秋の院展では皆様に御満足のいただけるような作品を披露申し上げたく、今から準備、制作に取りかからせていただきます。

微力ではございますが、皆様の暖かい御理解と御支援のもと頑張ってまいります。よろしくお願い申し上げます。

理事長
宮廻 正明
（みやさこ・まさあき）

修復を終えた尼僧肖像四躰の安座法要

――よみがえる尼門跡像

かつて、皇女が代々の住持をつとめた尼門跡寺院。近年、研究が進み、ベールにつつまれたその姿が明らかになりつつある。今回の修復事業においても……。

中世日本研究所・所長
モニカ・ベーテ

多くの善意と熱意が結集して

「平成」から「令和」に御代が替わろうとする四月二三日、京都市北西部に位置する臨済宗の眞如寺において、歴代の宝鏡寺御門跡の内、第一九世・月鏡軒尼（一五九四～一六八〇）、第二〇世・仙寿院宮（一六三一～一六五六）、第二十一世・高徳院宮（一六四一～一六八九）、第二十二世・本覚院宮（一六七二～一七四五）の尼僧頂相像※四躰の安座法要が行われた。安座法要とは修復を終えたお像を奉じて、お堂に安置し、安泰を祈念するためにお経を唱える法要で、六年にわたる修復完了のお祝いであった。

二〇一三年に傷みの著しい一躰目のお像の修復申請をし、申請が受理され、そして無事に修復事業を始めることができた。朽ち果てようとするお像を目の前にし、私たちも祈る思いで、一年毎に一躰ずつ申請をさせて頂いた。（公財）文化財保護・芸術研究助成財団のご理解と長年にわたる尼門跡寺院修復プロジェクトへのコミットメントはまさしく文化財の赤十字、頼れる砦のように心強いことだった。

スポンサーとして協力頂いた東芝プラントシステム株式会社は、この文化財修復を社会貢献事業として取り組み、社内での文化に対する理解、そして、文化財修復が会社の事業とも共通するメンテナンスや危機管理という視点で捉え長年ご協力いただいた。修復を担当した（公財）美術院国宝修理所では、修復を終えた像の底辺裏側に修理の施主や協力者、技術者、年月などを修理の証として銅板で付される。もちろん、この度の四躰のお像全ての台座の裏側にもその名が刻まれている。東芝プラントシステム株式会社社員一同が、誇りに思える事業だと言われたことが印象に残る。

美術院国宝修理所の所長はじめ、高田明技師、浜田史技師らは長期に渡りお像と向き合い、真摯に心と時間をかけて、最高の技術力を持ってお像の修復に携わって頂いた。お像と対話をするように日々取り組み、まさに生き返らせて頂いた。

所蔵者である眞如寺の江上正道住職はもちろん、尼門跡寺院である宝鏡寺門跡をはじめ、京都府文化財保護課の方々の献身的な助言など、この度の取り組みは単に修復事業に留まらず、協力関係の波及効果は大きく、いろいろな方面で喜ばしい成果をもたらした。

私ども中世日本研究所も研究者としてこの修復事業の最初から最後まで関わり、無事に終えることができたことを自負していると素直に申し上げたい。

多くの方々の温かいご支援ご協力により修復事業は実現し、今回の安座法要を行うことができた。全ての方々への感謝の意が込められた法要では、鐘の音が響き、経が唱えられ、香がゆらゆらと立ちのぼり、法堂には美しく復活した四躰の尼僧が静かに安座した。

眞如寺法堂内、尼僧頂相像四躰が並ぶ。平成31年4月23日に安座法要が執り行われた。
左より月鏡軒尼、仙寿院宮、高徳院宮、本覚院宮のお像

江上正道御導師のもと、安座法要終了後に陵墓内にて墓参する

尼僧のお像が四躰も一堂に並ぶことは稀で、これらの肖像彫刻は一七世紀から一八世紀の皇女尼僧を写実的に現している。江戸時代の比丘尼御所が盛んであった時期を具象的に想像できる肖像彫刻であり、歴史的にも文化財としても重要である。

頂相像が語りかけてくるもの

仏像のように理想化したお像と違い、頂相像は生きておられた僧侶を後の代に伝えるために、内面の人間性をも如実に現す。修復前には、四躰のお像全ての頭部顔面は表情が読み取れないぐらい酷く剥落していた。幸い最初の修復を行った本覚院宮は、本覚院宮自らが描いた自画像が宝鏡寺門跡に残されていた。また、前修復の白い胡粉塗りの下に、制作時の肌色に近い彩色が首の隠れたところや手の裏に残されていたため、これを手掛りに顔を復元することができた。この最初のお顔の修復が、残りの三躰の修復方針の手掛りとなった。

お像に残る過去三回ほどの修復の痕跡は、先人から受け継ぎ、繋がれてきた文化や文化財をしっかりと次へ紡いできたことを表している。再生した尼僧像が語られているのは、歴史を繋ぐ重要性であろう。

最後に修復を終えた仙寿院宮像は、父君である第一〇八代・後水尾天皇（一五九六～一六八〇）によって作像を命じられた（『隔蓂記※※』）重要なお像である。仙寿院宮は二五歳という若さでお隠れになった。後水尾天皇は、娘の供養のために、宝鏡寺の菩提所であった眞如寺の法堂の再建を支援し、仙寿院宮のお像を安置した。衣や沓に見られる繊細な美しい彩色にも父親の思いと嘆きが読み取れる。修復の際には、胎内納入品が見つかった。若かりし日の仙寿院宮の自筆の写経や、筆を何度も重ねた幼い修行の日々の記録のような書き物が多く納められており、生き生きとしたその筆跡に生前の姿を偲ばずにはいられない。修復によって剝落著しかったお顔はふくよかに若返り、仙寿院宮は今も手を合わせ、目を細め、心の底から祈り続けている。

修復を終えた
仙寿院宮像

修復前の仙寿院宮像

仙寿院宮像の胎内納入品

宗教的遺産として、文化遺産として

仙寿院宮像の隣に座するのは一〇歳年下の妹、高徳院宮像である。そのお顔は慈愛に満ち、歳を重ねられたお姿は、若くしてこの世を去った姉を見守り続けているようだ。像内の底部には念珠、念珠入れ、遺灰袋が見つかり、右腕内部からは光明真言が書かれた短冊四〇〇枚が納められた包みも見つかった。これらの短冊は高徳院宮への追善供養であったと推測され、残された人達の深い敬慕の情が伺える。

仙寿院宮像と高徳院宮像の両像は同じ袈裟をつけており、実姉妹であったことと、禅宗の習わしで袈裟の伝法が受け継がれていることを示している。

眞如寺には、他にもう一体の修復未定の尼僧頂相像がある。宝鏡寺が法灯を継ぐ、後の尼五山筆頭の景愛寺の開山であった無外如大尼大禅師（一二二三～一二九八）の像である。如大尼は一三世紀に日本の臨済宗において尼僧にして初めてお悟りを開かれた方と言われ、晩年、正脈庵という庵で余生をすごされた。正脈庵はのちに眞如寺となり、無外如大尼大禅師は勧請開基とされている。

まさしく、私ども中世日本研究所にとっては、この無外如大禅尼との出会いが、尼門跡寺院修復プロジェクトを立ち上げた〝きっかけ〟であり、後水尾天皇が眞如寺を再建したのも、宝鏡寺歴代門主が無外如大禅尼の遺徳を偲ばれたことからである。二〇二三年には無外如大禅尼の生誕八〇〇年を迎える。歴代の尼僧たちが無外如大禅尼の遺徳をしのびながら、歴史の節目に相応しい事業を遠忌法要などで行ってきたことも明らかになってきた。

今回の修復プロジェクトも安座法要で完結とせず、新たな始まりとして捉えている。修復を記念し、通常非公開の眞如寺では特別拝観と四日間の特別講演を行った。この修復事業のまとめとして、眞如寺はじめ、尼門跡寺院、修復事業の重要さなどを社会に伝え、日本文化や歴史に触れる機会を提供できたことも報告させていただく。

修復前の高徳院宮像

修復後の高徳院宮像

仙寿院宮像の袈裟（膝前）

高徳院宮像の袈裟（膝前）

※禅宗の高僧の肖像　※※金閣寺の住職・鳳林承章が1635年から68年に書きつづった日記

国宝「信貴山縁起絵巻」現状模写研究について

絵画の修練において模写は必須。優れた古典は、模写する者に、学ぶ者に、なにを語りかけてくるのだろうか……。

東京藝術大学美術学部教授
手塚 雄二
（てづか・ゆうじ）

信貴山縁起絵巻について

国宝信貴山縁起絵巻は日本の四大絵巻の一つです。東京藝術大学日本画研究室では、四大絵巻のうち白描画である鳥獣人物戯画絵巻を除いた、源氏物語絵巻、伴大納言絵巻、信貴山縁起絵巻を日本最高の絵巻と考え、大学院における研究授業の一環として現状模写事業を続けてまいりました。この三つの絵巻は、平安時代、国風文化が最も盛んとなった頃に当時の最高ランクの画家達によって描かれました。私が考えるに、平安の朝廷は絵画を含めた日本の文化振興に最大の力を注いでおり、文化を創る事こそが国家権力の象徴であったと思います。このように国から支援を受けた平安の画家達は最高の絵具と技術を用いて絵巻を描き上げたのです。ところが平安以降、鎌倉、室町と武士の政権になった事で文化への投資が減り、平安ほどの絵巻は産み出されなくなりました。

では、前記に挙げた三つの絵巻は他の絵巻と何が異なるのか、一言で言うと、それは〝斬新さ〟です。例えば構図に斬新さが見て取れます。中国から伝来した絵巻は人物と風景が均等に分かりやすく描かれていますが、三つの絵巻は配置に抑揚があり、物語を伝えるという役割以上に絵画としての美しさが追求されています。源氏物語絵巻は美しい構図の基本を確立していると言っていいでしょう。それはあえて余白を作ったり、建物の傾きを出したり、均等ではない構成を指します。アンシンメトリーな構成が魅力のある絵画へと繋がるのです。

米俵が画面外から飛んでくるところに奇想天外な発想が表現されている

激しい急流。山裾を行く人。山容が描かれていないところにスケール感が出る

伴大納言絵巻は絵巻の流れにリズムがあり、それが斬新さに繋がっています。一人の人間しか登場しない場面もあれば画面全体が人で埋め尽くされている場面もあります。人の頭を楽譜に見立てるならば、伴大納言絵巻は交響曲のように静寂と激情があるのです。

信貴山縁起絵巻はというと、斬新な構図の切り方をしている点が特質だと言えます。普通ならば人や山を画面に収めようとしますが、信貴山縁起絵巻はそれらを大胆に天地で切っているのです。（図参照）山は画面外に出すことでスケール感が出ますし、米俵を画面外に出したり入れたりすることで、絵巻を鑑賞する人の目線を誘導することができます。このようにモチーフを画面から切ってしまう構図は物語を伝える絵巻物の性質上、タブーに思えますが、絵画性を優先できたということは、それだけ当時の画家に自由が許されていたということになります。平安時代の文化に対する許容度の高さが伺えます。

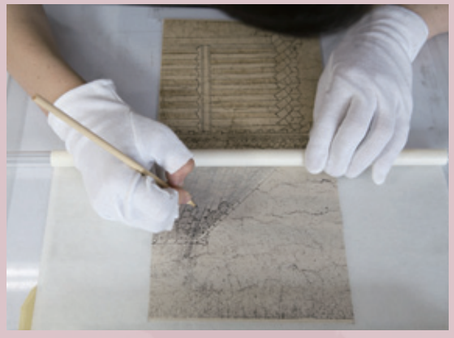
これら三つの絵巻を模写することによって、この時代の絵描きの斬新さを大学院生は学び、その身に取り込むことができるのです。それこそが東京藝術大学日本画研究室の模写事業の目的なのです。

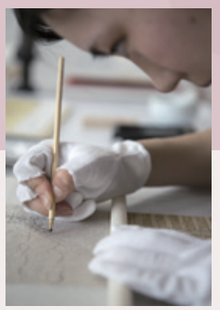
信貴山縁起絵巻を模写する意義

信貴山縁起絵巻の模写をすることで〝斬新さ〟の他に〝線〟について学ぶことが多くあります。信貴山縁起絵巻の絵は、仮名文字や漢字の打ち込みのような書の書体である真・行・草の真体の線で描かれています。つまり、線の強弱があるということです。この流れは狩野派につながっており、一つの〝型〟と言えます。模写をする学生には、〝型〟にはまるなとは言いつつも、日本美術の〝型〟の原点を知ってもらいたいのです。

現在の藝大の日本画では、安田靫彦（一八八四～一九七八）や小林古径（一八八三～一九五七）などの新古典派の流れで、強弱のない無個性な鉄線描で線を描くことを教えますが、大学院生たちは修士課程の二年間を集中して模写することで、国宝の〝線〟とは何か、が分かってきます。模写を完成させると、それまで気付かなかった他の絵巻物の線や構図に比べ、国宝である信貴山縁起絵巻の方が優れていることを理解し、良い線と悪い線を一目で判別できるようになります。

その結果、実際の絵巻にも描き直した修正部分があることを発見しました。





模写は大切な授業。模写を通して、絵画における「線」とはなにか、「構図」とはなにか、といった疑問に答えが生まれてくる。

これは絵巻研究に関しても大変意義があり、実際に絵描きが模写をすることでしか気付けなかったことかも知れません。

国宝を創る作家を現代に

私が思うに、模写をした学生は国宝の線や構図を知り、自身の中に取り込むことで、一流のものがわかるようになります。それは未来の作家を育てるための模写であり、古いものを残す模写ではありません。とても優れた作品を模写することによって、絵描きとしての感覚を高めるために信貴山縁起の模写をしているのです。

結果的に作家として確固たる日本画の次代を担う人間を生み出すことに繋がります。この模写をした学生の中から、必ず日本画界の頂点に立つ人間が現れます。そして、その後の学生にも影響を与え、日本画は世界に向かって発信していきます。と言っても、世界に向かうという言い方は語弊があり、そうしなくても、日本画は世界に通用する最高の絵画だと私は思っています。

東京藝術大学日本画研究室の模写事業は、世界で最高の絵画である日本画を生み出すための仕事なのです。日本の未来の文化を支える作家は、この模写をした人間から現れます。まず良い〝型〟を知らないと、それを超える良いものを生み出せるわけがありません。

国宝を模写することでそれを超える、未来の国宝を生み出す作家を育てています。

※　※　※

今後とも藝大日本画研究室をよろしくお願いいたします。

https://nihonga.geidai.ac.jp

「延喜加持の巻」（部分）天翔ける剣鎧護法童子。雲の上を疾駆する姿が、軽妙な筆致によって巧みに描かれている

「尼公の巻」より（部分）。描かれているのは創建当時と思われる東大寺の大仏

注：信貴山は奈良県北西部、生駒山地南部にある山。絵巻は10世紀初めに朝護孫子寺（信貴山寺）を再興した修行僧・命蓮にまつわる「山崎長者の巻」、「延喜加持の巻」、「尼公の巻」の三つの奇跡談を三巻に描いた絵巻。12世紀後半に成ったものと思われる。作者不明。

鳴門海峡の渦潮を世界遺産へ

鳴門海峡の渦潮（うずしお）を世界遺産へ

地球、月、太陽の絶妙な潮汐力（ちょうせきりょく）のバランスと瀬戸内海の特異な海底地形が生み出す海の壮大なハーモニー――渦潮の世界遺産登録をめざす人々の情熱を紹介！

うず潮を世界遺産にする淡路島民の会　顧問
長尾 正和（ながお・まさかず）

鳴門の渦潮を世界の渦潮へ

淡路島と四国の間にある鳴門海峡の急流に発生する、直径が最大で二〇メートル以上になる渦潮は、一・三キロという狭い海峡の幅や海底の特殊な地形と、月の引力によって生じる潮の干満時刻と潮流が紀淡・明石海峡の両海峡を回って鳴門海峡に達する時刻との絶妙な一致と、淡路島の位置的な特性とが相まって作り出される世界的な奇観であり、これまで多くの観光客をひきつけるとともに文人・画家などの文化的な対象としての役割を果たしてきました。私たちはこの渦潮が「顕著な普遍的価値（人類にとって特に重要な価値）を有し、将来にわたる保全すべき世界遺産」としての登録条件を十分満たすのではないかと考えています。我が国ではすでに、知床、白神山地、小笠原諸島、屋久島、

歌川広重「阿波鳴門之風波」（国会図書館所蔵）

という四地域がユネスコ世界自然遺産の登録を受けていますが、この「天下の奇観」を国際的にお認めいただきたいという強い思いから、兵庫・徳島両県の関係自治体を主体として所属議会議員、民間団体等で構成される「兵庫・徳島『鳴門の渦潮』世界遺産登録推進協議会」を設立して、登録に向けての運動を行っています。

この運動は平成一〇年に鳴門市の住民団体が中心となって立ち上げたことから始まりましたが、本格的な活動は平成二十二年になってからです。同年、淡路島の観光関連産業に従事する有志の方々により、兵庫・徳島両県や島内三市、鳴門市等の自治体、関係議会議員への要望、地場産業関係者への説明、陳情を精力的に開始しました（この運動の開始にあたっては少子高齢化に悩む淡路の地域活性化への期待が込められていました）。幸い多くの関係者のご賛同を得てこの運動は急速に広がりを見せてきましたが、この間にあって、「国生みフォーラムin淡路島」での、元ユネスコ事務局長松浦晃一郎氏のご講演により、「鳴門海峡大橋の架橋による自然景観の変貌」についての懸念の払拭に大きな勇気づけをいただきました。

渦潮と大鳴門橋

渦潮と観潮船

原動力は地元の熱意

そして、平成二十六年に入り、淡路島三市と二十四団体による「鳴門の渦潮世界遺産推進協議会」の設立、渦潮をはさむ対岸両市（南あわじ市・鳴門市）の「交流会」の設置、「淡路島民の会」の設立、鳴門市における「市民の会」の設立、「淡路島内の県・市議会議員による推進連盟」の設立を経て、同年十二月、兵庫・徳島両県知事を会長とし三十八団体を構成員とする、地域挙げての推進団体である上記「兵庫・徳島『鳴門の渦潮』世界遺産登録推進協議会」（以下「兵庫・徳島推進協議会」と書きます。事務局は兵庫県淡路県民局、徳島県広域行政課）が発足しました。

同協議会のメンバーである私ども「淡路島民の会」は、島内で活動する多くの産業・団体で構成されており、協議会と連携して、島内の高速道路SAでの宣伝や、島内で開催されるマラソンなど様々なイベントにおける宣伝など様々なサポート活動をしていますが、特に次の二つについては事務局、実施団体として積極的に活動しています。

(1)島内海岸清掃活動

二年前の平成二十九年から始めたものですが、市民ボランティア団体の協力を得て海岸でのごみ清掃活動を年に一日、一カ所で行っています。昨年は三〇〇名以上の方々にご参加いただきましたが、三年目である今年は島内の三市や対岸の鳴門市の四カ所で同時期に実施することを目標として、現在関係者への働きかけを行っています。この活動については事前の告知、駐車場や飲食物の提供など、県（淡路県民局）、島内三市、議員連盟、実施地域や企業の多くの皆様のご協力をいただいています。

鳴門海峡を臨む海岸のクリーンアップ活動

(2)小学校への出前講座

ボランティア団体の方々と共に、島内の小学校にうかがい、渦潮発生のメカニズムの説明などの「授業」を行っています。余興として渦潮音頭を披露するほか、大きな渦ゴマやペットボトルを改良した渦作り器を持って行き生徒さんに手にしてもらっていますが結構楽しんでくれています。

これらの活動は、鳴門の渦潮についての理解、その価値の重要性や保全・保護の必要性、地域活性化や一体感醸成の意義などについて地元の皆様と一緒に考え、活動することにより世界遺産推進へのご理解、ご協力やご支援をいただきたいという思いで続けています。

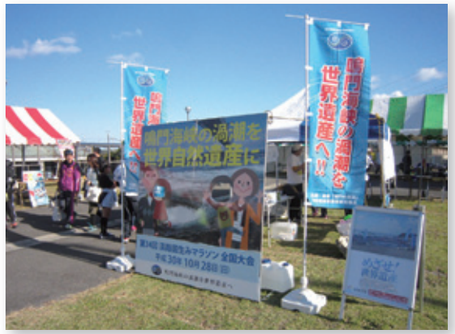
小学校での出前教室

夢の実現にむけて、まず第一歩

言うまでもなく、世界遺産として登録が実現されるまでには国内、ユネスコにおける種々の厳格な審査を経る必要があり、目下は申請者となる自治体（兵庫・徳島推進協議会が実質的な活動主体）において、第一の関門である国内における暫定リスト掲載のための申請（令和二年の春を予定）に向けて、「鳴門海峡を渦潮の世界的な普遍的価値・唯一性を立証するための学術的調査（渦潮の規模・発生メカニズム、地形・地質調査、国内・国際類似資産の比較調査、歴史・文化的価値に関する調査等）」が行われています。このほか、兵庫・徳島推進協議会では講演会、シンポジウム、交流会などさまざまな事業を行っています。今年三月には、渦潮を観光資源とするノルウエーの自治体関係者等をお呼びしてのシンポジウムが淡路島で開催されました。

※　※　※

以上述べましたように「淡路島民の会」が行っている活動はごくささやかですが、自治体や会員のご指導やご支援を得つつ、さらにはサポート会員の方々のご厚意にも応えるべく、これからも地道に続けてまいる所存です。そして、この活動が地域活性化に多少とも資することになれば幸いです。



国生みマラソン大会におけるPR活動

筆者略歴

一九四二年生まれ。高校まで淡路島で育つ。東京大学法学部卒。一九六五年運輸省入省後、国鉄改革推進部監理課長、大臣官房審議官等を経て、日本観光協会理事長、運輸政策研究機構（現運輸総合研究所）理事長等を歴任。現在「うず潮を世界遺産にする淡路島民の会」顧問。

「尺八」――シンプルで複雑な楽器の魅力

極めてシンプルな構造の管楽器――尺八。
しかし、その音は変化に富み、時に蠱惑的でもある。
三代にわたる演奏家の家に生まれた当代が尺八の素晴らしさを語る。

東京藝術大学非常勤講師
青木 鈴慕
（あおき・れいぼ）

◎尺八という楽器と歴史

真竹をくりぬいたシンプルな楽器です。標準の長さは「一尺八寸」、諸説ありますが、この文字をご覧頂けばわかるとおり、故に「尺八」なのです。蛇足だとは思いますが、メートル法では約五四・五センチメートルとなります。

尺八の歴史に少し触れますと、古代中国唐の時代に日本へと伝来し、長い年月をかけ、十七～十八世紀に現在の尺八の形に進化してきました。江戸時代には、幕府公認の禅宗の一派である普化宗の僧侶であった「虚無僧」が尺八を法器として演奏し、天蓋と呼ばれる深編笠をかぶり托鉢行脚で諸国を回っていました。十八世紀中頃には、黒澤琴古という人物が虚無僧が吹いていた楽曲から三十六曲をまとめ、楽譜を作成したことにより広がり、尺八最古の流派である「琴古流」が誕生して現在に至っています。

現在、東京藝術大学邦楽科尺八専攻には、琴古流と明治二九年（一八九五）に創立された都山流の二つの流派があります。

昭和3年（1928）青木家。中央が青木仁峯、一番右が初代青木鈴慕

◎尺八と私

私が演奏しているのは、琴古流です。ここで私の家と尺八の関わりについて少し書かせていただきます。曾祖父の青木仁峯が、松本藩で維新後に京都仁和寺の書記を務めており、その時に尺八の修行を積んだことに始まります。仁峯四男誠造（初代青木鈴慕）が兄と共に「鈴慕会」を組織し本年で百十一年目となります。初代鈴慕六男、私の父二代青木鈴慕（一九三五～二〇一八年八月）は幼少時には青瓢箪と呼ばれるほどの虚弱体質で尺八は吹くなと言われていたそうですが、十六歳の時にコンクールで優勝するなど若い頃より活躍し、平成十一年（一九九九）には人間国宝の認定を受けました。そこに生まれ育った私は、小学校一年生の時より、父に尺八の手ほどきを受けました。多忙な父のお稽古は、毎週日曜日の朝八時からと決まっており、鈴慕会の演奏会などには出演しておりましたが、父からは一度も「後を継げ」と言われたことはありませんでした。高校時代には、絶対に乗るなと言われていたオートバイの免許を取り、乗るようになりました。後に父はその時のことを「もう息子は死んだものと思った」と話していたそうです。そんな私でしたが、やはり常に身近にあった尺八の音楽、その音色の魅力を強く感じ、自然とこの道に進む決意をし、文化庁の研修生として大阪へ合奏の稽古と製管（尺八製作）の勉強に通いました。そうして父にこの道へ進む決意を伝えた時に父から帰ってきた言葉は「そうか」の一言でした。平成三十年五月に三代鈴慕襲名披露演奏会を開催した際には、父は大変喜んでおりました。

2名の演奏写真。左が二代青木鈴慕、右が三代青木鈴慕（筆者）「呼返 鹿の遠音」於・紀尾井小ホール

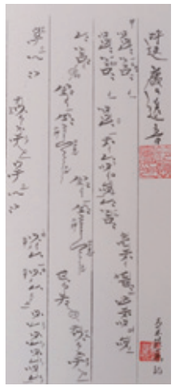
6名の演奏写真 右から三代鈴慕長男青木滉一郎、三代青木鈴慕「萩の露」於・日本橋公会堂

いろいろな長さの尺八。右から1尺1寸、1尺3寸、1尺6寸、1尺8寸、2尺、2尺3寸

◎シンプルだけれど複雑

尺八という楽器の構造は、先述しましたように真竹の節をくりぬいたもので、表に四つ、裏に一つ、合計五つの指孔があるのみです。しかも尺八の内部はピカピカに磨き上げられています。管内に地と呼ばれる、漆、砥の粉、水を練ったものを厚く塗り、乾燥後にゲージで測りながら削ります。おおよその理想の内径に整いましたら、試し吹きしては地を塗り削る。各音の鳴り具合で、調整する位置も微妙に変わるので経験も必要ですが、何度も何度も繰り返し行います。見た目のシンプルさからは分からない大変な手間がかかっています。尺八の長さは、一尺八寸の他に、一寸刻み（半音刻み）で、一尺三寸～二尺三寸がよく使用されます。中には三尺超える楽器を演奏する演奏者もおります。実用的な音域は二オクターブ半で、十二音階を出すためには、指孔の開け具合と顎の角度を変え、歌口（吹き口）部分の開口面積を変化させ各音を作っていきます。尺八の基本的な五つの音（ロ・ツ・レ・チ・リ）を含め、すべての音を演奏者自身が調整して音高を定めて演奏します。

ここで、尺八のもつ微妙な表現や奏法の一部をご紹介します。「メリ」は顎を引き音程を下げます。「カリ」は顎を上げて音程を上げます。「メリ」と「カリ」の変化は連続して行うことが多く、その音の幅は一音半にもなり演奏上多用され、尺八音楽の大きな特色となっております。「ユリ」は首を縦にゆっくりと振る一種のビブラート奏法です。「ナヤシ」はポルタメント※の一種で、指と顎を連動させ音程を変えてゆきます。「ムラ息」は効果音などに用いられることも多い奏法で、歌口に太めの強く速い息を吹きつけて噪音のような音を出します。



楽譜。二代青木鈴慕著・琴古流本曲「呼返 鹿の遠音」

◎楽曲・楽譜

琴古流尺八の演奏家が演奏する曲としては、琴古流本曲・尺八古典本曲、外曲として生田流・山田流の箏曲・地歌、新曲や現代曲になります。楽譜は古典曲に関してはカタカナ表記の楽譜で、左右の点と補助線で拍子を表しています。現代曲では五線譜を使用します。

◎尺八の魅力

では尺八の魅力とはなんなのでしょうか。私が考える尺八の魅力はまさにその尺八らしい音色です。それは、演奏家によって異なる魅力を発しています。名人の演奏を聴けばその音色だけで、誰が演奏しているかすぐに分かるのです。演奏家にとって尺八の一音一音に微妙な音色の違い、性格の違いのあることが重要であります。移調楽器である尺八では、長さの異なる尺八で五つの指孔を全閉した音が、どの長さの尺八でも「ロ」の音に聴こえなければなりません。その為には、各音に性格付けしていくという修練が必要になります。その音を探求していくことが、演奏家としての修行であるとともに独自性を追い求める楽しさでもあるのです。

◎尺八のこれから

シンプルで複雑な楽器、尺八をもっと多くの日本の人々に聴いてほしい、吹いてほしいと願っております。二〇二〇年には、東京オリンピック・パラリンピックが開催され、多くの外国の方も日本に目を向けることと思います。外国の方々の中にも、尺八の多様な音色に触れ、その奥深さに取りつかれる方もおられます。また、演奏時の袴姿から「侍」を連想する方もいます。日本人のみならず、様々な方と尺八の音色の魅力を共有できるよう、私たち演奏家は努力していかねばならないと思います。

大勢での演奏写真。2018年5月3日。三代青木鈴慕襲名披露鈴慕会百十周年記念演奏会曲は「雲井獅子」於・国立小劇場

筆者略歴

琴古流尺八を父二代青木鈴慕（人間国宝）に師事。一九九二年文化庁芸術インターンシップ生。一九九五年第一回リサイタルを開催、以降七回開催。二〇〇六年東京藝術大学非常勤講師。二〇〇八年鈴慕会百周年記念演奏会を開催。二〇一四年第五回「創造する伝統賞」受賞（日本文化藝術財団）。二〇一八年三代青木鈴慕襲名披露・鈴慕会百十周年記念演奏会を開催（国立小劇場）。

現在　琴古流協会副会長、（公社）日本三曲協会常任理事、現代邦楽作曲家連盟理事、洗足学園音楽大学現代邦楽講師、琴古流尺八鈴慕会会長。

※ひとつの音から次の音へのつなぎ目を極めてなめらかに演奏すること。

定款第4条の定めに従い、次の事業を行いました。

平成三十年度事業報告

■文化財保存修復助成事業

国内文化財の保存修復助成事業として、27都府県教育委員会から推薦のあった61件の中から、27件について助成を行った。

（敬称略・以下同）

（美術工芸）

①山形県・昌伝庵
木造伝大日如来坐像保存修理事業

木造伝大日如来坐像
（修復後）

②香川県・行徳院
木造六字尊像保存修理事業

③愛媛県・安楽寺
木造十一面観音立像保存修理事業

④高知県・金剛福寺
木造不動明王立像及び木造毘沙門天立像保存修理事業

⑤福岡県・高倉一矢
承天寺古図保存修復事業

承天寺古図保存修復事業
（修復後）

（建造物）

⑥岩手県・早池峰神社
本殿保存修復事業

⑦宮城県・賀茂神社
本殿保存修復事業

⑧福島県・八幡神社
拝殿保存修復事業

⑨埼玉県・宮代町
旧加藤家住宅屋根修繕工事

⑩千葉県・三柱神社
本殿保存修復事業

⑪東京都・小泉秀夫
小泉家屋敷保存修復事業

小泉家屋敷

（修復前）

（修復後）

⑫神奈川県・北金目神社
本殿保存修復事業

⑬新潟県・大日雲神社
大日堂保存修復事業

⑭石川県・天徳院
山門保存修復事業

⑮福井県・成願寺
経蔵保存修復事業

⑯長野県・大英寺（長野市）
本堂及び表門保存修復事業

⑰静岡県・瑞雲院
鐘楼保存修理事業

⑱三重県・春日神社
拝殿保存修復事業

⑲奈良県・万法寺
本堂保存修復事業

⑳鳥取県・桑田東之夫
桑田家住宅及び醤油醸造施設保存修復事業

㉑島根県・（有）並河不動産
並河家住宅及び土蔵保存修理事業

㉒山口県・（公財）小田家博物館
小田家土蔵他保存修理事業

㉓徳島県・美波町
谷家住宅保存修理事業

㉔鹿児島県・大和村
大和浜の群倉 屋根葺替事業

（有形民俗）

㉕富山県・八尾町下新町曳山保存会
八尾町祭礼曳山（下新町）保存事業

㉖岐阜県・揖斐祭芸軸保存会
揖斐祭の芸軸（鳳凰軸）保存事業

揖斐祭の芸軸（鳳凰軸）
（修復後）

㉗滋賀県・金英町
日野曳山祭／金英町曳山保存事業

■芸術研究等助成事業

文化財の保存修復及び芸術に関する調査研究、成果の発表、国際交流事業の実施等に対する助成事業として申請のあった14件の中から、10件の事業に助成を行った。

①KAGURA for Peace2018 in Hirosima
平和の舞 ―鎮魂と再生― ひろしま神楽と〈オロチ、神楽とオーケストラの協演〉（エリザベト音楽大学 名誉教授 四川音楽学院・広州大学・内蒙古師範大学客員教授 伴谷晃二）

横田・葛城山

②国宝「信貴山縁起絵巻」現状模写研究（東京藝術大学 美術学部絵画科教授 手塚雄二）

③和楽の美「安土桃山～信長・秀吉英雄譚」（東京藝術大学 音楽学部邦楽科准教授 味見 純）

④滋賀院門跡の境内および建築の復原的考察（東京藝術大学大学院 文化財保存学保存修復（建造物）博士後期課程 小柏典華）

⑤ミュージック・フロム・ジャパン44周年音楽祭（日本現代音楽協会理事 斉木由美）

⑥第24回東京三味線・東京琴展示・製作実演会＋公開シンポジウム「芸能の継承を支える技術 ―楽器製作・修理技術と材料・道具―」（東京文化財研究所 無形文化遺産部 無形文化財研究室長 前原恵美）

⑦オーケストラ・プロジェクト2018（東京学芸大学 教育学部教授 山内雅弘）

⑧新出・曾我二直菴印「架鷹図屏風」の絵画材料と絵画技術の研究（金沢美術工芸大学准教授 荒木恵信）

⑨文化財保存修復を目指す人のための実践コース～「紙」文化財を学び、活用する～（文化財保存支援機構理事 増田勝彦）

⑩中世以降の金剛力士像における構造の研究 ―雨引山楽法寺金剛力士像を中心に―（東京藝術大学 美術研究科 文化財保存学教授 籔内佐斗司）

■国際協力事業

文化財の保護及び芸術文化に関する国際的な協力・交流、人材養成事業など申請のあった11件の事業の中から、8件の事業に対して助成を行った。

①敦煌研究院より研究員招致（武 瓊芳氏）
平成30年4月1日～平成31年3月31日
（敦煌研究院院長 王 旭東）

②敦煌研究院より研究員招致（水 碧紋氏）
平成30年10月1日～平成31年9月30日
（敦煌研究院院長 王 旭東）

③ファヤズ・テペ遺跡出土仏教壁画の保存修復（奈良文化財研究所 国際遺跡研究室 アソシエイトフェロー 影山悦子）

④イタリア中部地震で被災した文化財建築の保護に関する研究（名古屋市立大学芸術工学研究科教授 青木孝義）

⑤「弥勒の道」再生プロジェクト（東京藝術大学社会連携センター ユーラシア文化交流センター プロジェクト特任教授 井上隆史）

⑥カンボジア伝統染織技術の品への利用再生継承のためと発展に向けたラックの試験養殖実験（京都府立大学生命環境科学研究科 共同研究員 北川美穂）

⑦中央ユーラシア出土の符の研究（帝京大学 文学部史学科准教授 柿沼陽平）

⑧キルギス・チュー川流域出土仏教彫塑の調査研究 ―砕葉鎮時代を中心に―（東京藝術大学 特任研究員 森美智代）

■重点助成事業

⑴熊本地震被災文化財救援・復旧支援事業

熊本地震により被災した文化財の救援と修復のために平成28年度から募金を行い、5年計画の3年目になる。平成28年度から実施した文化財レスキュー活動への助成は終了し、事業実施予定であった個別の被災文化財への修復支援については、募金額の残額等を勘案し、また、文化庁及び熊本県と協議中であることから平成30年度の助成は休止することとした。

○平成三十年度募金（寄付）受入状況
受入件数 25件
受入金額 985千円

⑵松尾大社本殿等保存修復支援事業

松尾大社本殿並びに神庫・楼門修復及び神域内の諸整備事業を行い、貴重な文化遺産を後世に守り伝えるための事業。3カ年計画の第Ⅲ期事業（最終年度）として奏殿御屋根銅板葺替・外壁塗り替え、神像館瓦屋根葺替・外壁塗り替え等の助成を行った。

平成三十年六月に本殿遷座祭・奉幣祭が執り行われた。

楼門

奉幣祭

⑶その他（東日本大震災被災文化財救援・復旧支援事業）

本事業は平成24年度から5年計画で実施したが、引続きの助成要望及び募金受入れもあることから本年度も助成を行った。

申請のあった11件の中から審査の上、10件に助成を行った。

○平成三十年度募金（寄付）受入状況
受入件数 13件
受入金額 1、065千円

（建造物）

①岩手県（国登録）・盛合光徳
盛合家住宅復旧・復元修理事業

②岩手県・橋野町振興協議会会長 和田松男
栗橋分工場周辺の保存修復事業

栗橋地区忠魂碑（施工後）

③岩手県・菊池長一郎
東屋復旧・復元修理事業

④宮城県・奥平穣士
奥平家住宅倒壊防止応急対策事業

⑤宮城県・山元町長 斉藤俊夫
「仙台藩大條家茶室」構造と部材調査

⑥福島県・宗教法人 真照寺 代表役員 山岸英男
古四王堂震災復旧再建事業

古四王堂（修復後）

⑦福島県・天野高夫
天野家住宅主屋他修復事業

⑧福島県・藤田彌五兵衛
藤屋建造物群 店舗修復事業

⑨福島県（国登録）・一般財団法人可月亭
庭園美術館 代表理事 星野 珙
旧鍋三本店土蔵における館内環境保全機能の高次化事業

（美術工芸）

⑩宮城県・東北大学 工学研究科准教授 野村俊一
東北帝国大学・仙台高等工業学校旧蔵建築資料修復・保存・公開事業

■シンポジウム等の開催事業、その他普及広報活動

文化財の保護及び芸術振興に関する啓蒙活動、国際交流、広報活動として広報誌の発行、文化交流フォーラムの開催、その他普及広報活動に関連し次の事業を行った。

①広報誌「絲綢之路」の発行

第87号（二〇一八 夏）
平成30年6月18日発行
第88号（二〇一八 秋）
平成30年10月20日発行
第89号（二〇一九 新春）
平成31年1月25日発行
発行部数：各2、000部
配 布 先：都道府県教育委員会、美術館・博物館、文化財研究機関、芸術系大学、新聞社、支援者、賛助会員、理事・評議員、その他関係者に配布

②文化財保存修復支援カレンダー基金の募金活動（二〇一九年版カレンダー）

募集期間：平成30年9月～平成31年1月
製作題材：出光美術館所蔵「伴大納言絵巻」現状模写作品（7年目）［最終回］
募金応募件数：1、506件（募金額5、816、664円）

原本：出光美術館蔵 伴大納言絵巻 下巻-9の場面より
岩谷 晃太 模写

③日中韓文化交流フォーラムの開催

期間：平成30年9月14日㈮～18日㈫
会場：中国　貴州省貴陽市
行事：第14回日中韓文化交流フォーラム
テーマ：「茶文化の潜在力を掘り出し、運命共同体の構築に寄与する」

日・中・韓の代表団の方々

④「第23回妙高夏の芸術学校」の共催

主催：妙高夏の芸術学校実行委員会
共催：（公財）文化財保護・芸術研究助成財団、新潟日報社、妙高市他
期間：平成30年7月21日㈯～7月24日㈫
参加者：日本画（19名）油彩画（12名）水彩画（13名）デッサン・スケッチ（7名）小学生（5名）計56名

⑤第69回社会を明るくする運動「～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～」に協力

主催：〝社会を明るくする運動〟中央推進委員会他

⑥講演会・シンポジウム・展覧会等の後援

㈠第13回「文化財保存・修復―読売あをによし賞」を後援
主催：読売新聞社
後援：文化庁、大阪府教育委員会、独立行政法人国立文化財機構他

㈡文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム
「文化遺産国際協力のかたち―世界遺産を未来に伝える日本の貢献―」を後援
主催：文化庁、文化遺産国際協力コンソーシアム他
後援：国際交流基金、東京文化財研究所他

㈢セミナー「文化財保存修復を目指す人のための実践コース」を後援
主催：特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
共催：東京国立博物館
後援：東京藝術大学、（公財）日本博物館協会、（一社）文化財保存修復学会他

㈣震災復興支援文化財救済活動チャリティー企画
第20回「文化人・芸能人の多才な美術展」（Entertainment Art Exhibition）
～広げよう文化の輪・芸術は地球を救う！～ 20周年特別展を後援
主催：特定非営利活動法人 日本国際文化遺産協会　文化人・芸能人の多才な美術展実行委員会
後援：文化庁、公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟他

㈤「湘南アール・パレ展」を後援
主催：アール・パレ展実行委員会

三十年度ご支援いただきました賛助会員の皆様

法人正会員（十九社）　【五十音順】

朝日生命保険相互会社
株式会社NHKエンタープライズ
株式会社NKB
鹿島建設 株式会社
株式会社 講談社
株式会社 集英社
全日本空輸 株式会社
株式会社 髙島屋
株式会社 竹中工務店
株式会社 電通
東京ガス 株式会社
株式会社 東京ドーム
日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
野村ホールディングス 株式会社
有限会社 丸栄堂
三井住友海上火災保険 株式会社
株式会社 三井住友銀行
株式会社 三越伊勢丹
株式会社 ミロク情報サービス

法人維持会員（十二社）　【五十音順】

大塚ホールディングス 株式会社
洲本観光 株式会社
株式会社 精養軒
宗教法人 全昌院
大日本印刷 株式会社
大和建設 株式会社
株式会社 東京マルイ美術
株式会社 なとり
はぁーとふるふぁんど委員会
浜名梱包輸送 株式会社
株式会社 平成建設
株式会社 横井春風洞

ご寄付を頂きました皆様

●平成30年12月21日から令和元年5月20日まで
敬称略／順不同

☆寄付金

○文化財保存修復・芸術研究等助成事業に対する寄付
ヤフーネット募金（361名様）
文化財保存修復支援カレンダー募金
共同印刷株式会社

○熊本地震被災文化財救援・復旧支援事業に対する寄付
法華寺
（公財）中山道広重美術館

○東日本大震災被災文化財救援・復旧支援事業に対する寄付
（特非）日本国際文化遺産協会
国立歴史民俗博物館　理事長　松岡久美子

○松尾大社本殿等修復支援事業に対する寄付
平成の御遷宮奉賛会（12件）

お願い

◎熊本地震被災文化財の救援と復旧のための募金のお願い

平成二十八年四月に熊本県を中心に発生した熊本地震により被災した文化財の保全に向けて、募金活動を行っております。

いただきました浄財は、熊本地震被災文化財レスキュー事業等、被災地域の文化財の救援のために活用（平成二十八年度助成実施）させていただくとともに、文化庁・熊本県と協議の上、被災文化財の修復・保存のために活用させていただいております。

皆様の温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

募金のお振込み手続きは左記の銀行振込又は郵便振替によりお願い申し上げます。

＊

銀行振込（①銀行名②口座番号③名義）
① 三井住友銀行　上野支店
② 普通　8399622
③（公財）文化財保護・芸術研究助成財団

※銀行振込の場合、振込者の確認が難しいため、領収書、お礼状の発行等の必要上、財団事務局に事前にご連絡をいただけると幸いです。
（電話：〇三・五六八五・二三一一）

郵便振替（①振替番号②加入者名）
① 00160・5・123319
②（公財）文化財保護・芸術研究助成財団

※通信欄に「熊本地震」とお書きください。

◎賛助会員ご入会及びご寄付（前記のご寄付を除く）のお願い

〈賛助会員〉
当財団では、財団の活動趣旨にご理解、ご賛同をいただき、恒常的にご支援いただける法人、個人の賛助会員を募集しています。
法人正会員　年額（1口）　50万円
個人正会員　年額（1口）　1万円
維持会員　年額（1口）　10万円

〈ご寄付〉
賛助会員の他に、ご寄付も随時受け付けています。ご寄付には様々な方法がありますので、左記のとおりご紹介します。詳細は当財団事務局までお問い合わせ下さい。
（電話：〇三・五六八五・二三一一）

⑴銀行振込又は郵便振替
銀行振込や郵便振替でもご寄付を受け付けております。

（銀行振込）
〇三井住友銀行　上野支店
普通 6615500
〇みずほ銀行　上野支店
普通 4478576
〇三菱UFJ銀行　上野中央支店
普通 0796384

（郵便局から振込み）
〇郵便振替
00160・5・12319

※口座名義は、銀行、郵便局、いずれも（公財）文化財保護・芸術研究助成財団

⑵インターネットによるご寄付
次の手順によりインターネットから、クレジットカード又はTポイントによるご寄付（募金）を受け付けています。
←〇「YAHOO！JAPANネット募金」
←〇「文化・スポーツ」
←〇「文化財保存修復支援募金」
←〇「クレジットカード」又は「Tポイント」を選択
←〇 募　金

⑶特定寄付信託
信託した金銭を運用収益とともに寄付するものです。当財団は、みずほ信託銀行と特定寄付信託に関して契約しています。詳細は左記にお問い合わせ下さい。
みずほ信託銀行
（電話：〇三・三二七四・九二〇三）

⑷遺贈
「遺贈」による寄付・相続財産の寄付を承っております。
「遺贈」とは、遺言により、ご自分の財産を特定の人や団体に分け与えることをいいます。受取人として、法定相続ではなく遺言書により、一部またはすべての財産の受取人として、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団をご指定いただくことができます。財団に寄付をされた場合、相続税の控除を受けることができます。
遺贈をご検討いただく際は、お電話かメールにて当財団までご相談ください。

⑸商品券・図書券等による寄付
ご家庭のタンスや事務室の机等の中で眠っている、未使用の商品券、図書券、切手、収入印紙、ビール券、お米券、旅行券、QUOカード、テレホンカード、書き損じ葉書等もご寄付として受け入れております。
お送りいただく場合は、当財団事務局宛てに封書にてご郵送下さい。

＊＊＊＊＊

●税法上の優遇措置
当財団は、「公益財団法人」としての認定を受けておりますので、寄付金には税法上の優遇措置が適用され、所得税、法人税等の控除が受けられます。詳しくは当財団ホームページでご確認いただくか事務局までお問い合わせください。

今号の表紙

平山郁夫　京都御所建礼御門

京都御所建礼御門　2004年

平安京において、壮大な内裏（だいり）の外郭の南正門に建礼門はあった。現在も、京都御所の南面正面は建礼門である。この門は最も格式が高く、天皇、皇后以外では外国の元首級の方しか通ることはできないとのこと。

檜皮葺（ひわだぶき）、切妻屋根、角柱四脚の現在の門は明治十二年（一八五五）の再建。王朝文化華やかなりし時代、正月七日にここで白馬節会（あおうまのせちえ）が行われた。今は京都三大祭りにおいて、葵祭（あおいまつり）と時代祭の行列が、ここを出発の地としていることで知られる。

本作品は平山画伯の晩年の大作「平成洛中洛外図」を構成する一作。画伯は、その中で皇室ゆかりの建物や地を数多く描いている。それは千年の都（みやこ）・京都へのオマージュであり、皇室への崇敬の念によるものと思われる。

編集後記

「平成」から「令和」へと時代が変わりました。とは、申しましても、何がどう変わったのか、これは実感としてまだ分かりません。しかし、新しい時代が平和で、豊かな時代であれ、と願うのは誰もが一致するところです。

私ども財団事務局のある上野公園は、今、鮮やかな緑につつまれております。年々歳々人変われども、公園の緑よ、いつまでも……と思ったりもいたします。

「平成」の始まりと共に財団は、歩みを始めましたが、時が移り変わっても財団がかかげる大義にむかって歩む歩調に変化はありません。

文化財を守り、有能な芸術家を支援するという使命を実践することは、なかなか大変なことです。皆さま方の御理解とさらなる御支援を切にお願い申し上げる次第です。

広報誌「絲綢之路（しちゅうのみち）」（シルクロード）
二〇一九年　夏号　通巻第九十号
●
★令和元年六月十八日発行
★編集発行／公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団　事務局©
〒110-0007 東京都台東区上野公園十二―五十
電　話（〇三）五六八五―二三一一
FAX（〇三）五六八五―五二一五
URL:http://www.bunkazai.or.jp/
E-mail:jimukyoku@bunkazai.or.jp
★印刷　株式会社 東都工芸印刷